

レックをランデイの重要な構成要素として位置づけ、ミナンカバウの文化的表現としてこれらのジャンルを考察している。著者自身が実際にシレックを習得した経験に基づく具体的で分析的な記述が本書の随所に見られる。たとえば、第3章のシレックの習得過程(28-32頁)、第7章の打楽器と踊り手のスラッピングのパターンの図式化(106-112頁)、第9章における護身術を用いた戦いの展開方法の類型(130-144頁)などの記述は、十分な観察と的確な分析による成果として興味深い。また、第5章の上演テキストの考察においては、物語のレパートリーや、グリンダム *gurindam* という詩の形式に則って語られるテキストの分析、物語の基本的構成、様々な言語レベルにおける表現方法に関する記述が見られ、語りや言葉がミナンカバウの人々にとっていかに重要であるかという点が提示されている。さらに巻末には実際の上演テキストの記録が付録として添付されている。

本書は、基本的出発点として、舞台芸術ランデイと護身術シレックの二つを研究対象としており、著者の議論には最初からランデイはシレックを起源とする芸術ジャンルだという前提がある。たとえば、著者は第2章において、ランデイの歴史的記述の中でランデイの主たる起源説として、歌と舞踊、物語の語り、シレックをそれぞれ起源とする3つの説を検討し護身術シレックが起源であるという結論に至る(16-21頁)。しかし、そもそも護身術・語り・民謡・舞踊・音楽・演技などの様々な要素をもつ芸術ジャンルの起源を一つのジャンルに限定する意義はあるのだろうか。第5章で著者自身が示すように、物語やテキストもランデイの重要な構成要素の一つである。さらに、ランデイの起源に関する議論のプロセスは、先行研究の成果や調査地でのインタビューの結果などの提示が十分でないため、読者に対する説得力に欠けている。これはおそらく、著者の議論にランデイの起源はシレックであるという前提が存在するためだと思う。

著者は、本書の結論において、ランデイにおけるシレックは単に芸術形式上の構成要素であるにとどまらず、その哲学がランデイの上演を統合するという意味で重要な要素であることを指摘する(154頁)。こうしたシレックの哲学は、物語の登場人物が

シレックを極めるために修行の旅に出るという形で主題として強調される点、シレックの師匠が寛容で高德な人物として描かれている点、戦いの場面における高德なヒーローの戦い方はシレックをあくまで護身術の手段として用いており、観衆に争いの解決の適切なモラルを提供している点、などにあらわれている(154-155頁)。こうした結論に至るためには、ランデイという独特な芸術ジャンルの検討を出発点にして様々な構成要素を分析し、ランデイにおけるシレックの形式上・哲学上の重要性を指摘するに至るという記述のプロセスが必要だったのではないだろうか。個々の記述は興味深いデータを提示しているが、本書の全体的構成については再考の余地があると思われる。

最初に述べたように、本書はシレックとランデイに関する概説的モノグラフとしては貴重な業績である。上演の実践経験とインテンシブな調査の成果にもとづく今後の研究の深まりを期待したい。

(福岡まどか・国立民族学博物館)

*Overtaken Chariot: The Autobiography of Phan-Boi-Chau.* Translated by Vinh Sinh and Nicholas Wickenden. Honolulu: SHAPS Library of Translations, University of Hawai'i Press, 1999, ix-x+296p.

Reading through this autobiography of Phan-Boi-Chau, the acknowledged father of Vietnamese nationalism, I was struck by three attributes of his generation of revolutionaries that had disappeared by the time of his death.

The first is the unusual candidness and remarkable humility that he and his comrades showed with regards to two of their weaknesses: political tactics and organizational resilience. Phan's account is littered with failures to collect arms consistently, botched attempts to attack the French and the inability to maintain security against French counter-attacks (often aided by the British, the Chinese and the Japanese). We do not read about astute revolutionaries or conspirators in this book; instead we are presented

with acknowledged amateurs in the art of anti-colonial warfare. And what kept Phan and his comrades going was sheer tenacity, anchored in the undying dream to liberate Vietnam from the French.

The second is the awareness of early South-east Asian nationalists of their connection with other movements against colonial rule in Asia. Phan believed that Vietnam's struggle against French colonialism was a cause equally shared and believed in by China and Japan. While these countries eventually failed Phan with their lack-luster and erratic support for the Vietnamese nationalist movement, what is significant is the early nationalists view of their redemption as an inherent part of a larger regional quest for liberation. Vietnamese communists therefore could not claim sole proprietary rights to internationalism as they were preceded by Phan-Boi-Chau and his generation.

Finally, there is the absence of factionalism between Phan and his comrades. The autobiography lacks the ideological correctness that became characteristic of revolutionary movements in Southeast Asia in the Stalinist era (particularly when the Soviets began to call for a line of march different from and critical of other left-wing currents like the Trotskyists and social democrats the world over). Phan's initial support for the restoration of the Vietnamese monarch did not, in any way, create a rift between him and those comrades who openly advocated republicanism. This lack of political vitriol between two disagreeing positions would disappear by the 1930s as Stalinist methods began to dominate the radical wing of the nationalist movement. But by then Phan had receded to the political background.

(Patricio N. Abinales • CSEAS)

Christiaan Heersink. *Dependence on Green Gold: A Socio-economic History of the Indonesian Coconut Island Selayar*. Leiden: KITLV Press, 2000, vi+374p.

スラウェシ島南西半島部の東端に、耳飾りのようにぶら下がった細長い形の島がある。本書によって、ココナツ交易をめぐる社会経済史が明らかにされたスラヤル島である。本書は、17世紀後半から20世紀前半における、ココナツ交易による富の蓄積とその過程、島内の覇権争いと、社会経済的差異の出現に注目して記述された歴史研究である。

この島の地図上の位置はたいへん興味深い。第一に、島がマルク諸島とマカッサルを結ぶ航路上に位置することである。マルク諸島は、オランダ東インド会社(VOC)が香料の独占交易をおこなったことで知られる。マカッサルは、17世紀後半から東インドネシア地域最大の森林物産および海産物の集散地であった。第二に、島がスラウェシ島に隣接していることである。スラウェシ島は、移動性の高い生業活動と東南アジア島嶼部における活発な交易活動で知られるブギス・マカッサルの人々の本拠地である。

スラヤル島は複雑な地形の島である。急峻な斜面が深く海に落ち込む東岸部、人口はもっとも多いが農作物の栽培に適さない土壌に覆われた北部、なだらかな丘陵部とわずかな平野部やマングローブの汽水帯と入り江が混合する中西部、もっとも肥沃な土壌を有する南部とに分けられるという。こういった生態環境の差異は、島の共同体の性格を多様に特徴づける。島の生態環境では、スラヤル布として商品加工される綿花とココナツ以外には、自給的に栽培される作物にも限りがあった。生態環境の異なる共同体間の社会関係において、ココナツが財として green gold という価値を与えられるようになる背景である。

興味深い土地柄であるにもかかわらず、スラヤル島に関するまとまった歴史研究がこれまでなかったのはなぜだろうか。第1章で著者はその理由を次のように述べる。オランダ植民地政府が直接的に交易を支配しなかった「取るに足らない社会の研究」は、「民族誌家や文化人類学者にまかせてしまえ」とい